

Lacan の *La science et la vérité* における三位一体と Filioque について

小笠原 晋也

1965-66 年の Séminaire XIII *L'objet de la psychanalyse* [精神分析の客体]の初回, 1965 年 12 月 1 日のテキストは, *La science et la vérité* [科学と真理]の表題のもとに Lacan の *Écrits* の最後のテキストを成している.

そこにおいて Lacan は, 精神分析の客体の本源性を示すために, 精神分析の言説の構造が魔術, 宗教, 科学, 精神分析の四分野において如何に機能しているかを分析しつつ, 主体の存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ においてこの構造の原因を成す客体 a がそれら四つの分野において Aristoteles の四つの原因のいずれとして現れているかを示している. すなわち, 魔術においては客体 a は作用因 [ἡ ἀρχὴ τῆς κινήσεως, *causa efficiens*] として, 宗教においては目的因 [τὸ οὐ ἔνεκα, *causa finalis*] として, 科学においては形相因 [τὸ τί ἦν εἶναι, *causa formalis*] として, そして精神分析においては質料因 [ἡ ὕλη, *causa materialis*] として, 機能している.

ここでは, Lacan が神学に如何に強い関心を有していたかを垣間見るために, 先だつての日曜日(2014 年 6 月 15 日)が三位一体の主日であったことにちなんで, Lacan が三位一体と, それに関連して Filioque [「および御子から」: « Spiritus Sanctus qui ex Patre Filioque procedit » 「聖なる霊気は御父および御子から発する」という信仰箇条の文言にかかわるローマ・カトリックとギリシャ正教との対立]の問題に言及している『科学と真理』の部分 (*Écrits*, p.873) を読んでみよう:

Il ne nous semble pas du tout inaccessible à un traitement scientifique que la vérité chrétienne ait dû en passer par l'intenable de la formulation d'un Dieu Trois et Un. La puissance ecclésiale ici s'accommode fort bien d'un certain découragement de la pensée.

Avant d'accentuer les impasses d'un tel mystère, c'est la nécessité de son articulation qui pour la pensée est salubre et à laquelle elle doit se mesurer.

Les questions doivent être prises au niveau où le dogme achoppe en hérésie, – et la question du *Filioque* me paraît pouvoir être traitée en termes topologiques.

L'appréhension structurale doit y être première et permet seule une appréciation exacte de la fonction des images. Le *De Trinitate* ici a tous les caractères d'un ouvrage de théorie et il peut être pris par nous comme un modèle.

S'il n'en était pas ainsi je conseillerais à mes élèves d'aller s'exposer à la rencontre

d'une tapisserie du XVIème siècle qu'ils verront s'imposer à leur regard dans l'entrée du Mobilier National où elle les attend, déployée pour un ou deux mois encore.

Les Trois Personnes représentées dans une identité de forme absolue à s'entretenir entre elles avec une aisance parfaite aux rives fraîches de la Création, sont tout simplement angoissantes.

Et ce que recèle une machine aussi bien faite, quand elle se trouve affronter le couple d'Adam et d'Ève en la fleur de son péché, est bien de nature à être proposé en exercice à une imagination de la relation humaine qui ne dépasse pas ordinairement la dualité.

Mais que mes auditeurs s'arment d'abord d'Augustin...

“我れらには、キリスト教の真理が「三にして一なる神」という弁明困難な公式化を受け入れねばならなかったという事態は科学的考察にとって近づきたいことだ、とは全く思われぬ。教会権力は、そこでは、或る種の「思考する気力の喪失」で大いに満足しているが。

“三位一体の如き神秘は行き詰まりであると強調する前に、思考にとって健全であるのは、この神秘の組み立ての必然性[に関して問うこと]であり、そして、そのような主題において思考は自分の度量を試すことになるはずである。

“問いは、教義がつかまついて異端に陥る地点において捕らえられるべきである — そして、わたしには、Filioque の問いは *topologie* の用語において論ぜられ得ると思われる。

“その場合、構造論的問題把握はまず最初に為されるべきものであり、そして、そのみが、影像の機能の正しい評価を可能にする。[Augustinus の著作]『三位一体について』は、ここで、理論的著作の特徴すべてを有しており、我れらにとってひとつの手本とし得るものである。

“さもなくば、わたしの弟子たちにこう勧めるところだろう、すなわち、或る 16 世紀の綴れ織り壁掛けとの出会いに身をさらしに行きたまえ、と。それは Mobilier National [国有物品保管庁]の入口であとさらに一ヶ月か二ヶ月間展示されており、彼れらを待っている。そこで彼れらは、それが彼れらのまなざしを圧倒するのを経験するだろう。

“[その壁掛けにおいては、父と子と聖なる霊気の]三つの位格が、絶対に同一なる形姿において描かれており、創造されたばかりの被造界の岸辺で全くくつろいで会話しているが、彼れらはただひたすら無気味である。

“そして、このように見ごとに作られた大作が保匿しているものは、罪のまっさかりにおける Adam と Eva のカップルと対置されるとき、通常双数を超えることのない人間関繋を思い浮かべること

慣れている想像力に対して練習問題として提示されるような性質のものである。

“しかし、聴衆諸兄は、まずは Augustinus を読んで準備しておくように...”



まず, Lacan が言及している展覧会は, Paris 13 区にある Gobelins 織り工場の敷地内に建てられている Mobilier National [国有物品保管庁]において 1965 年 10 月から翌年 1 月まで催されていたものである。そこでは, 旧約聖書の創世記に基づく主題の絵柄を織り込んだ壁掛け作品が幾つか展示された。前頁の図は, Lacan が話題としているふたつの作品である。上の図には三位一体が, 下の図では左側に Adam と Eva が蛇にそそのかされて禁断の実を食べている場面, 次いで右側に彼らが天使により Eden から追い出される場面が描かれている。

四世紀にニカイア・コンスタンティノポリス信条と呼ばれる信仰簡条において三位一体の教義が確立される前には, イエスの人間性と神性とに関してさまざまな異説があったが, 最終的に三位一体説以外のものは異端の烙印を受けた。ここでそれにかかわる複雑な神学的議論に立ち入る必要は無かろう。

Filioque [および御子から]というラテン語の単語によって差し徴される神学的問題とは, 本来のニカイア・コンスタンティノポリス信条には無い「および御子から」という語句を挿入することが八世紀から西方教会の諸地域で広まり始め, ついには公認されたことを理由に, 東方教会(ギリシャ正教)と西方教会(ローマ・カトリック)とが 11 世紀に分裂するに至った事態である。

本来のニカイア・コンスタンティノポリス信条においては, 聖なる靈気に関する部分は次のとおりである:

« Πιστεύω (...) καὶ εἰς τὸ Πνεῦμα τὸ Ἅγιον, τὸ κύριον, τὸ ζωοποιόν, τὸ ἐκ τοῦ Πατρὸς ἐκπορευόμενον, τὸ σὺν Πατρὶ καὶ Υἱῷ συμπροσκυνούμενον καὶ συνδοξαζόμενον, τὸ λαλῆσαν διὰ τῶν προφητῶν » [そして, 我れは信ずる, 聖なる靈気を:それは主である;命を与える;御父から発する;御父と御子と共に礼拝され, 栄光を受ける;かつては預言者らを通して語った].

この「聖なる靈気は, 御父から発する」は, 明確にヨハネ福音書の一節に基づいている:

« τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας ὃ παρὰ τοῦ πατρὸς ἐκπορεύεται » [御父から発する真理の靈気] (Jn 15,26).

いかにもその靈気を弁護者として御父のもとから我れらへ送ってくださるのはイエスなのだが, 福音書の文言には「御父および御子から」とは書かれてはいない。

ところが、西方教会は、ニカリア・コンスタンティノポリス信条のラテン語版に「および御子から」を公式に挿入してしまった:

« Credo (...) in Spiritum Sanctum (...) qui ex Patre Filioque procedit (...) » [我れは信ずる, 聖なる靈気を:(...)それは, 御父および御子から発する(...)].

ギリシャ語圏の東方教会は、ラテン語圏の西方教会が聖書の原文に無い語句を勝手に挿入したことを咎め、結局、11世紀に両者は相互に破門しあい、キリスト教世界は分裂した。

言い添えておくと、1995年にこの破門は相互に撤回された。そして、先々代の教皇ヨハネ・パウロ II 世と先代の教皇ベネディクト XVI 世は、ギリシャ正教の総主教と共にギリシャ語でニカリア・コンスタンティノポリス信条を唱える機会を持ち、そのとき、「および御子から」の無い本来の文言のものを唱えた。

神学的観点からは「および御子から」の挿入は如何に不適切であるかを後ほど説明する。

Lacan が我れらに読むよう勧めている聖 Augustinus (354-430) の著作 *De Trinitate* [三位一体について]は、400年ころから416年ころまでの十数年にわたる彼の論考の成果であり、今すぐたやすく読み飛ばせるようなものではない。

ここでは、代わりに、三位一体の主日のミサにおいて朗読された聖パウロの第二コリント書簡とヨハネ福音書の箇所にある言葉を手掛かりにしよう:

« Ἡ χάρις τοῦ κυρίου Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ καὶ ἡ κοινωνία τοῦ ἁγίου πνεύματος μετὰ πάντων ὑμῶν » [主イエス・キリストの恵み, 神の愛, 聖なる靈気の交わりが, あなたたち皆と共にありますように] (2 Cor 13,13);

« Οὕτω γὰρ ἠγάπησεν ὁ θεὸς τὸν κόσμον, ὥστε τὸν υἱὸν αὐτοῦ τὸν μονογενῆ ἔδωκεν » [そも, 神は, 御ひとり子を与えたほどに, 世を愛した] (Jn 3,16).

Lacan は « Filioque の問いは topologie の用語において論ぜられ得る » と言っているが、勿論, Filioque のみならず, 三位一体の概念そのものが topologie の用語において論ぜられ得る。その際, 準拠すべきは, 存在の topologie の構造そのものである存在の真理の現象学的構造 [la structure phénoménologique de la vérité de l'être]: $\frac{a}{\phi}$ である。

三位一体の概念において、強調されるべきは「三にして一」の「一」である。それは単にキリスト教がユダヤ教ならびにイスラム教と同じく一神教であるからではない。八百万神がましますと言われる日本の神道においても、この同じ「一」がかかわっている。禅考案に言う「万法帰一」の「一」も、まさにこの「三にして一」の「一」である。

なぜなら、この一は、存在事象を「ひとつ、ふたつ...」と数えるための計数ないし計量の「一」ではなく、而して、存在の *topologie* における *ex-sistence* としての存在 Φ の処有の唯一性としての一であるから。

Lacan が *Séminaire XIX* において « y a d'Un » [一が在る]と言うときも、同じく、「三にして一」の一がかかわっている。この « de l' » という部分冠詞は、存在の唯一性としての一 Φ は決して十全に表されないということを示している。

つまり、「一が在る」は、Lacan が *Télévision* の冒頭に言う「我れは常に真理 Φ を言う:すべてではない」と等価である。

存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ において、*signifiant a* は、存在の仮象にすぎぬがゆえに、それが代表すべき真理 Φ に対して決して十全適合的ではない。したがって、存在の真理をすべて言うことは不可能であり、言いかえると、存在の真理の唯一性の一はその全体において表言され得ず、「一が在る」と言うとするれば、その命題において「一」の冠詞には定冠詞ではなく、部分冠詞を用いざるを得ない。

しかし、何よりも先に、この「一」は、ユダヤ教の信仰箇条のなかに見出される:“聴け、イスラエルよ!我れらの神 YHWH は、一なる YHWH である”(Dt 6,4)。

燃えあがる柴のなかから YHWH がモーゼに אלהי אשר אלהי [我れは「我れは在る」である] (Ex 3,14) と言って己れを啓示するとき、この「我れは在る」は *ex-sistence* における存在の真理の処有そのものであり、「三にして一」の一である。したがって、YHWH はモーゼに語りかけるのではなく、より適切には、こう書き送るべきであっただろう: 我れは存在である。

イスラエルの民が YHWH の名をそのものとして発音することをやめたとすれば、それは、同じく、YHWH はその存在の真理において存在であり、便宜的に抹消されて書かれ得はしても、そのものとして表言され得はしないからである。

三位一体の教義においては、神は父と子と聖なる靈気の三つの位格 [*ὑπόστασις*, *persona*] において一である、と説かれるが、父の位格は、存在の真理の座、すなわち、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ における Φ の座に相当する。

言葉 *λόγος* として肉と成った子の位格は、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ における

ἀλήθεια の座, すなわち, α の座に相当する。

では, 聖なる靈気は? それを存在の真理の現象学的構造において思考するためには, 靈気とは何かを改めて問わねばならない。

旧約聖書における ΠΝΓ, 新約聖書における πνεῦμα は, ともに, 大気であり, その動きである風であり, そして, 生命の象徴としての呼吸の息吹である。創世記の冒頭において水面の上を舞うのは神の息吹である。神はアダムを創造するとき, 自分の息をアダムに吹き込み, アダムに命を与える。神の息吹は, 天から地へ吹き下り, 地のすべてに新たな命を与える。処女マリアは神から πνεῦμα ἅγιον を受けてイエスを受胎し, ヨハネがイエスに洗礼を授けるとき, πνεῦμα は改めて天からイエスへ吹き降りてくる。復活したイエスは弟子たちに息をふきかけ, πνεῦμα ἅγιον を受けよと言う。そして, イエスは, 天の御父のもとから我れらに τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας を弁護者として送ってくださる。さらに, イエスの受難と復活の後の最初の Πεντηκοστή の日に, πνεῦμα ἅγιον は炎, つまり熱い気として, 天から使徒たちへ吹き下る。

旧約聖書における ΠΝΓ, 新約聖書における πνεῦμα の基本的な意義を差し徴し得る語を日本語のなかに探し出すとすれば, それは「気」であろう。ΠΝΓ および πνεῦμα という用語の翻訳には「精気」が最もふさわしいと思われるが, πνεῦμα ἅγιον を「聖なる精気」と呼ぶのは「せい」の音が繰り返されて煩わしい。そこで, 伝統的な「聖霊」の訳語を踏まえて, 「聖なる靈気」と訳すことを選択する。文脈によっては「神聖靈気」と訳しても良いかもしれないが, その表現は若干滑稽であるかもしれない。

聖なる靈気は, 人間を愛する神 [ἠγάπησεν ὁ θεὸς τὸν κόσμον] から人間への「与える」[διδόναι, dare] であり, それによって神は人間を神との κοινωνία, communio の状態に導き入れる。それが ἡ κοινωνία τοῦ ἁγίου πνεύματος [聖なる靈気の交わり] である。

「交わり」と曖昧に訳される κοινωνία, communio の語が差し徴しているのは, 複数の者が何かを分かち合い, 共有し, それによって相互に何らかのつながり, きづなを持つことである。

神が人間に与えたものは, 神の御ひとり子イエスにほかならない [τὸν υἱὸν αὐτοῦ τὸν μονογενῆ ἔδωκεν]. 「主イエス・キリストの恵み」[ἡ χάρις τοῦ κυρίου Ἰησοῦ Χριστοῦ] は, したがって, 確かにイエスは人間に恵みを与えてくださるが, 第一義的にはむしろ, イエス自身が神から人間へ与えられた恵み, 賜である, と解される。

この神の「与える」によって, 人間は神との交わりへ導き入れられ, そして, 神性 — つまり, 永遠の命 — に与ることができる。このことを儀式的に象徴するのが, ミサにおいて行われる聖体拝領であり, communion の語はそれだけでこの聖体拝領を差し徴し得る。

以上から、聖なる靈氣は、父なる神 ϕ が御ひとり子イエス a を世に与える — すなわち、Es gibt Sein [何かが存在を与える] — という事態、すなわち、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ をそのものとして成り立たせているものと見なされる。人間イエス a が、人間であると同時に神であるのは、彼れが父なる神 ϕ を世に対して代表する限りにおいてであり、その構造をそのものとして定立するのが聖なる靈氣である。三位一体の概念は、以上のように *topologique* に説明され得る。

聖なる靈氣の「与える」は、「父が子を与える」である。したがって、聖なる靈氣が発するのは御父からであって、「および御子から」[*Filioque*] を付加することは、聖なる靈氣の位格をそのものとして考察するならば、適当ではない。

Lacan は、彼れの教えにおいて、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ の可能性の条件を「父の名」と呼んでいる。三位一体の観点からは、父の名は聖なる靈氣と等価であると言うことができよう。

2014年6月19日